

胡堂賞

ほんとうはやさしくなりたいな

赤石小学校 1年 ふじわら ゆうな

よみきかせボランティアのかたに、このおはなしをよんでもらって、とてもびっくりしました。「三びきのこぶた」もおはなしは、しっていたけれど、そのぎやくのおはなしがあるとしらなかったからです。

オオカミは、さいしょからレンガのおうちをたてたのに、ブタは大きなハンマーでこわしてしまふのです。つぎには、なんとコンクリートでおうちをつくったのに、ブタはでんきドリルでこわしてしまいます。つぎには、てっじようもうやてっこつでうちをつくったので、これならだいじようぶだとおもったら、なんとブタはダイナマイトでふきとばしてしまいます。しんじられないわるいブタです。

もうオオカミはあんしんしてくらせないのかな、とおもいましたが、オオカミは、まちがったざいりようで、うちをつくったんだときぎました。そして、はなのうちをたてたのです。はなのかおりをたくさんすって、ブタはだんだんやさしくなりました。そういえば、ブタは、オオカミがあそんでいるときにうちをこわしにきたから、ほんとうは、なかよくなりたかったんだとおもいました。

わたしもときどき、いじわるをします。

ともだちにいじわるをされたらいやだから、さきにじぶんからいじわるをしてしまいます。そのときのもだちのかおをみて、「あ、やっちゃったんだな。」とおもって、かなしくなります。こういうことをしていると、いじわるをされそうで、やらなかったらよかったとおもうけれど、なかなかやさしくなれません。

かんそうぶんをかきながら、そんなことを先生とはなしていたら、ともだちが、「ゆうなちゃんは、やさしいよ。」とはなしてくれてびっくりしたけれど、とてもうれしかったです。ほんとうは、ともだちにやさしくしたいな。きっとブタも、そうおもっていたかもしれないとおもいました。

図書名
著者名

3びきのかわいいオオカミ
作…ユージン・トリビザス
絵…ヘレン・オクセンバリー
訳…こだまともこ

胡堂賞感想文について

審査員講評

あいだ
相田みつをの「セトモノ」の詩を思い出します。
オオカミが建てた花の家のように、どちらかがや
わらかい心をもつことが友達と仲良くなるコツ
ですね。この本から友達との付き合い方を考えら
れたところがすてきでした。

教育長賞

「おこだでませんように」を読んで

西の杜小学校 2年 細川 さくら

この本のだいい名を見た時、これは「おこられませんかのように」だなと思いました。なぜかという、ひょう紙の男の子が、かなしいとおこっているがまざっているような顔をしていたからです。目にはなみだがうかんでいてかなしいのをがまんしているみたいです。何が「おこだでませんように」なのかなどと思って、この本を読むことにしました。

この本の「ぼく」は、家でも学校でも毎日おこられています。ちゃんとリゆうがあっても、言うたまますおこられると思って、だまってよこをむいてしまいます。たとえば、妹がわがママを言ってけんかになったのに、それを言うとお母さんはもっとおこると思ってだまってしまいます。わたしも妹とけんかをすることがあります。でも、わたしのお母さんはけんかのりゆうを聞いてくれます。ぼくも話せばいいのにと思いましたが、言ってもむだだと思うくらいおこられてきたのかなと思うと、かわいそうにかんじました。

ある七夕の日、ぼくはたんざくにねがいごとを書きます。そこに書いたのが「おこだでませんように」でした。わたしは、ぼくは本当はほめられたいし、みんなにいつもにこにこしてほしいのだと思いました。だから、先生がほめてくれて、お母さんがぎゅうつとだきしめてくれた時すごくうれしくなりました。ぼくもうれしくなったから、もっといい子になろうと思ったのだと思います。

わたしは、この本を読んで、ちゃんと話すことが大じだなとかんじました。ぼくはまわりから見たらわるいことをしているけれど本当はほめられたいし、わるいがあつてやっていることばかりではありません。わたしのお母さんのように、きちんとリゆうを聞いたり話し合ったりすると、みんないい子でしあわせになると思います。これから、家でも学校で友だちと話す時でも、おこったりわるいときめつけたりせずにお話をして、たくさんの人となかよくしていききたいです。

図書名 おこだでませんように
著者名 作：くすのきしづのり

絵：石井 聖岳

優秀賞

おふとんさんを読んで

紫波東小学校 2年 むつじ たすく

ぼくは、「おふとんさんとねむれないよる」を読みました。本のだい名を読んで、なんでねむれないんだろうなと思いました。ぼくもねむれないのはいやです。ぼくは、テレビを見ていてねれませんが、しゅじん公のクーちゃんねむれないりゆうは、何だろう。読んでいくうちにりゆうが分かりました。

このお話は、クマのクーちゃんが、はじめて一人でおばあちゃんのお家にとまりに行くお話です。ひさしぶりに会ったおふとんさんとしゃしんを見たり、お話をしたり、楽しくすごしていましたが、夜にねむる時間になるといろんなわるいそうぞうをしてしまい、ねむれなくなってしまいます。そんな時、おふとんさんは、クーちゃんをやさしくなぐさめてねかしつけてくれます。

この本でぼくが好きなシーンは、クーちゃんがおばあちゃんのお家に入った時、おふとんさんがきゆうに話しかけて、クーちゃんがびっくりしたところです。ぼくもきゆうに話しかけられたら、同じようにびっくりすると思います。

夜になって、クーちゃんがこわいことがおこったろうしように言いはじめます。おばけが出たらどうしよう。こわいゆめを見たらどうしよう。ぼくもしっぱいしたらどうしよう、まちがえたらどうしようと、ふあんになることがあるので、気持ちがよく分かります。

クーちゃんは、おふとんさんがあんしんさせてくれたので、朝までねむることができました。ぼくもこまっていたり、ふあんになっていたりする人がいたら、おふとんさんみたいに、やさしくあんしんさせてあげられる人になりたいです。

ただ、ぼくがふあんになっているときは、だれかおふとんさんになってください。

図書名 おふとんさんとねむれないよる
著者名 コンドウ アキ

入 選

よかったね ギロンさん

日詰小学校 1年 あさぬま くるみ

「ギロンさん、こんにちは。おれは、ギロンです。」

ギロンさんは、じぶんでじぶんへおてがみをかいたよね。おともだちも、かぞくも、しんせきもないギロンさんは、だれからてもてがみをもらったことがなかったんだね。だから、うさぎさんやりすさんがうれしそうにてがみをもらっているのが、うらやましかったんだね。

どうしても、てがみをほしいからじぶんでかいたんだね。でも、なんかへんだったよね。わたしは、そんなギロンさんが、さみしそうでかなしくなっちゃった。

わたしは、おともだちからおてがみをもらったことがあるよ。あけるときは、なにがかいてあるのかなって、どきどきした。よむと、うれしくて、おへんじがかきたくなるんだ。

わたしは、ギロンさんがゆうびんやのタロウさんからおてがみをもらえてほんとうにうれしくなったよ。あんなにすてきなゆうびんうけをつくってだいにだきしめてまいにちまいにちとどくのをまっていたもんね。

ギロンさんもタロウさんにおへんじかいたかな。わたしは、ギロンさんがどんなてがみをかいたのかかんがえてみたよ。どうかな。

「タロウさんへ

このあいだは、おこつてごめんなさい。タロウさんからてがみをもらって、とてもうれしかったです。じぶんでかくより、だれかにもらったほうがとてもきもちいいね。てがみをもらいうれしいきもちがよくわかったよ。ゆうびんうけをいっしょうけんめいつくったよ。おへんじもらえると、うれしいな。」わたしは、ギロンさんがおてがみをもらったこともうれしいけど、タロウさんともだちになれたこと、とってもうれしいよ。これからもタロウさんとなかよくすごしてね。おてがみもつづけてね。

図書名
著者名

おてがみほしいぞ
作：こつまるみづほ
絵：丸山誠司

入 選

にじうおのようになりたいな

日詰小学校 2年 西川 こうしろう

ぼくは、ねる前にいつも本を読みます。いろんな本の中で、とくに気に入っている本が、「にじいろのさかな」です。きらきらしたうろこが、とてもきれいだからです。この本は、公みんかんで、ちいきの人からもらいました。読み聞かせにも来てくれる人で、おすすめの本なんだろうなと思いました。にじうおとよばれている魚が、いじわるをして一人ぼっちになってしまいました。きらきらうろこをたくさんもっているのに、一人ぼっちなんてさみしいだろうなと思いました。ぼくだったら、一まいくらいならすぐにあげると思います。友だちとおそろいだと、うれしいからです。

ぼくは、図工の学しゅうで新聞紙あそびをしたとき、けんかをしてしまいました。つくった新聞紙バットのとり合いになって、けんかになりました。そのときは、

「ぼくのバットなのに。」

と、友だちにかすが、いやだなと思えたからです。けんかした友だちとは、なかなかおりをしたけど、なんだかこころがもやもやしたままでした。家に帰ってから、新聞紙でバットとボールをお母さんといっしょにつくりました。つぎの日、友だちにわたすと、とてもよろこんでいました。なかなかおりをしたときよりも、ずっといい気もちになりました。ほかの魚に、きらきらうろこをあげたにじうおも、同じ気もちだっただろうなと思います。

きらきらうろこは、一まいだけになったけど、にじうおの近くには、たくさんのお魚たちがいます。ぼくが一番すきなばめんです。

ぼくもにじうおのように、友だちがたくさんいた方がうれしいので、いろんなものを分けたり、なかよくいっしょにつかったりできる人になりたいです。

図書名
著者名

にじいろのさかな
作…マーカス・フィスター
訳…谷川 俊太郎

入 選

「ぼくがラーメンたべているとき」をよんで

赤石小学校 1年 ひの りこな

このほんをよんで、しりとりみたいだなとおもいました。

ラーメンをたべているとき、となりでねこがあくびをしたり、ねこがあくびしているのとおなじときに、ほかのともだちがトイレをしていたり。

わたしがおうとのおせわをしているときほかのともだちはえいごをならっているかもしれない。そのとき、べつのもだちはサッカーをしているかもしれない。ピアノをひいているひともいそう。おなじときに、いろんなひとがいろんなことをしているんだなとおもうと、しりとりみたいで、とてもおもしろいとおもいました。

そうおもいながらよんでいたら、おんなのこがあかちゃんをせおっているところができました。そのこは、ひとり。おとなのひとは、はなれたところではたらいっています。おなじときに、みずくみをしているこもいました。それも、なべやばけつに。おうちからはなれたところで。みずは、すぐにはのめなさそうです。パンをうっているこもいます。しかもひとりで。どうして、どうして、とおもっていたら、たおれているおとこのこができました。だれもたすけにこなさそうです。なんでひとりぼっちなんだろう。あるいていてたいりよくがなくなったのかな。かぜがふいても、だれもこなくて、おとこのこは、ひとりでしんでいったんだとおもいました。

それは、わたしが、ごはんをたべているときかもしれないし、おうととあそんでいるときかもしれません。

おなじときに、いろんなことが、いっぺんにおきていることが、こわいしふしぎです。みんなが、どこにいても、けんこうでえがおでいきられたらいいのにおもいます。どこでなにがあるのか、もっとしりたいです。

図書名 ぼくがラーメンたべてるとき
著者名 長谷川 義史

入 選

つたわるきぼうとゆづ気

花巻市立東和小学校 2年 米谷 早智

ヘレン・ケラーは見えない、聞こえない、話せないという三つのしょうがいをおいながらも、きぼうをもって生きぬいた人です。わたしは三つのしょうがいをもった人がいたと知った時、何もできないと思ったので、かわいそうだな、たすけてあげたいなとかんじました。しかし、ヘレン・ケラーはかわいそうな人でも、たすけてあげなければ生きていけない人でもありませんでした。

このお話を読んでここにのこったことは、ヘレン・ケラーがなみはずれたど力をして大学に行ったことです。三つのしょうがいをもっている、ど力をしたり、家ぞくや先生のささえがあつたりすれば、きぼうをもちつづけることができるとわたしは学びました。しかもその後、三十年近くせかい中をまわり、体のふ自由な人たちははげまし、ゆう気をあたえつづけました。ヘレン・ケラーの家ぞくは、ヘレン・ケラーがおもいびよう気にかかり、三つのしょうがいをもったことで、何を考えているのか、何をつたえたいのか分かりませんでした。しかし、あきらめてしまふのではなく、このままではいけないときぼうをもちつづけて、家ぞくは先生をみつめました。そのおかげで、はじめはわがままだったヘレン・ケラーも、せかいにきぼうとゆう気をあたえる人になりました。

このように、きぼうとゆう気は人から人へつたわっていくと考えます。この前、学校で学年いいんのせんきよがありました。学年いいんになりたい気もちと、わたしにできるのかというふあんな気もちがありました。だから、ヘレン・ケラーのお話を思い出して、ゆう気をもらってりっこうほしました。学年いいんをしてみると、わたしなんかというふあんなはきえていきました。これからも、ゆう気をもっていろいろなことにちようせんしていききたいです。そしてわたしもヘレン・ケラーのようにきぼうやゆう気をあたえられるようになりたいです。

図書名 未来へはばたく おんなのこでんきえほん
著者名 堀米 薫